

Students

Faculty members

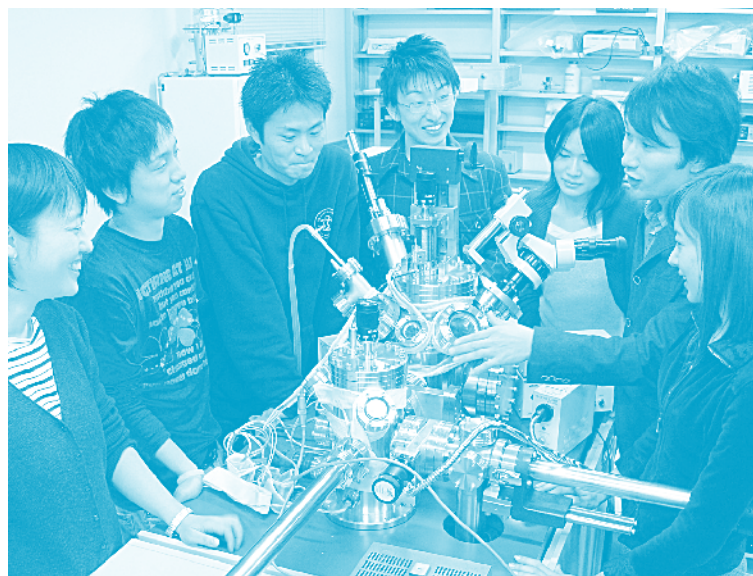
Administrative staff



A.G.U.

Aoyoma Gakuin University Faculty Development Activities Report 2006

●●●● 青山学院大学FDプロジェクトチーム ●●●●



CONTENTS

はじめに.....	1
大学新任教職員オリエンテーションの開催	1
授業公開の実施	2
総合企画部知的資産連携機構による研修	8
学生モニターからの意見聴取.....	10
学生モニターとの意見交換懇談会の開催	12
FDをとりまく環境	17
2007年度の活動に向けて	18

◆ ◆ ◆ ◆ はじめに ◆ ◆ ◆ ◆

副学長
国際政治経済学部・教授
FDプロジェクトチームリーダー 仙波 憲一

2006年度のFDプロジェクトの活動を、この度報告書としてまとめましたので、各部署でのFD活動に資することができれば幸いです。

本プロジェクトは、大学のFD活動とは何かの理念論からはじまり、本学において実行可能な活動の策定とその提案まで幅広く検討することを目的にするものです。2006年度は、授業公開ウィークを二週間にわたり開催しました。また、学生との意見交換懇談会も引き続き行ない、初年度のFD活動の開始を受け、それを継続する事でFD活動の更なる充実化を目指しました。これらを通じての大きな成果

は、FDのあり方や今後の展開について多くの意見を伺うことができたことでした。中でも事務方のメンバーから積極的な意見が出て、FD活動の運営や方法について教員だけでは考えられない視点が加えられ、それが上記の活動に反映されたことです。今後も、さまざまな活動を通して、また提案をしていく中で、青山学院大学の教育活動が活性化し教育の質が高まり、結果的に学生の学びが充実することにつながれば、大きな成果を挙げたことになると思います。皆様方のFD活動に対する御理解と御協力をお願いする次第です。

2006年度 FDプロジェクトの 主な活動

- 1 大学新任教職員オリエンテーションの開催
- 2 授業公開の実施
- 3 総合企画部知的資産連携機構による研修
- 4 学生モニターからの意見聴取
- 5 学生モニターとの意見交換懇談会の開催

大学新任教職員オリエンテーションの開催

副学長
国際政治経済学部・教授 仙波 憲一
(FDプロジェクトチームリーダー)

本学院に新たに就任する教職員に対して、学院では毎年4月上旬に「新任教職員オリエンテーション」を実施しており、理事長、院長、常務理事により、学院の概要、教育環境の外的・内的要因による変化、教育方針、キリスト教教育、寄附行為及び私立学校をとりまく法体系、学院の財政などについて説明がなされている。

さらに、特に大学に就任される方を対象とし、より詳しく大学の状況を理解していただく目的で、大学主催のオリエンテーションも別途実施することとし、2006年度は2年目を迎えることになった。昨年同様、大学執行部より、キリスト教信仰に基づく本学の教育理念についての説明がなさ

れた。特に会議その他公式行事の開催時には祈祷もしくは黙祷をもって始めることが紹介された。また、本学の予算規模、研究・教育関連の予算の執行方法や手順等について説明がなされ、引き続き、一部・二部の教育課程の特徴、さらには全学共通教育としての青山スタンダードについての説明がなされた。新任の方々が、直接学長から説明を受けることによって、大学への帰属意識が醸成され大学の一員としての自覚を持っていただければこの活動の意義は達成されることになると考えている。次年度も引き続きこの活動を続けたいと考えている。

授業公開の実施

文学部・教授 今井 重孝
(FDプロジェクトチームメンバー)

昨年度から始まった授業公開ウィークを、今年度も引き続き実施した。昨年度の参加者から「公開者や参加者の数がさらに増えるように工夫すべきである」との声があったので、公開期間を1週間から2週間に増やして、2006年10月10日より10月23日の日程で実施した。実施の仕方は、昨年に準じて、希望する教員に申し出てもらう方式を取った。その結果、公開授業科目数は、相模原キャンパスと青山キャンパスの合計で、昨年度が28であったのに対し、本年度は44（2週間にわたって公開された授業は2回と数えた場合の数）となった。また、参加者数においても、昨年度の27名に対し、本年度は、71名と増加した。

とはいえ、公開授業の科目の2週間の重複を除けば、2週間に延長したにもかかわらず公開授業科目数は昨年と同じ28であり、着実に授業公開者数が増加しているとはいいいがたいところがある。来年度に向けては、何らかの新しい対応が必要となろう。また、授業参観の参加者数は、71名と増加しているが、その内訳を見ると、教員13名、職員58名となっており、教員参加数の少なさが目立っている。青山と相模原の2キャンパス制ということもあり、教員が公開授業を見たいと思っても、その授業が自分の授業と重なったりして時間割上看ることができないことも影響していると推測される。とはいえ、青山学院のFDの特徴として職員と教員がタイアップしてやっている点があげられるが、事務職員の多さは、その点での長所が現れていると見ることもできる。

来年度の公開授業に関わっては、公開授業が大学全体の授業改善へとつながるような仕組みを整備すること、たとえば、各学部学科ごとに授業改善の工夫を毎年積み重ねて行くための組織を作るなどの措置が必要となろう。

あるいはまた、希望の授業が参観できない教員のために、参観希望の多い授業をビデオに録画して、そのビデオ上映会を授業者も交えて行

い、意見交換するなどのことも必要と思われる。あるいは、評判の高い授業をビデオ収録して、その上映会を行うということも考えられよう。

また、授業改善との関連で、各教員が授業で行っている工夫についてそれを調査し共有化する、という試みも必要であろう。

授業公開科目一覧

NO	開講キャンパス	担当者所属学部	教員氏名	授業開講日	時限	授業科目名	受講者数
1	青山	文学部	庄司 順一	10月10日(火)	2	臨床保育学	92
2	青山	国際政治経済学部	内山 義英	10月10日(火)	2	国際貿易Ⅱ	85
3	青山	法学部	西澤 宗英	10月10日(火)	3	民事訴訟法Ⅱ	274
4	青山	法学部	西澤 宗英	10月13日(金)	2	民事訴訟法Ⅱ	274
5	青山	法学部	西澤 宗英	10月13日(金)	3	フランス法	89
6	青山	国際政治経済学部	内山 義英	10月17日(火)	2	国際貿易Ⅱ	85
7	青山	法学部	西澤 宗英	10月17日(火)	3	民事訴訟法Ⅱ	274
8	青山	法学部	松川 実	10月19日(木)	3	知的財産法Ⅱ	349
9	青山	文学部	富山 太佳夫	10月19日(木)	4	英文学演習(4)	30
10	青山	法学部	西澤 宗英	10月20日(金)	2	民事訴訟法Ⅱ	274
11	青山	法学部	西澤 宗英	10月20日(金)	3	フランス法	89
12	青山	経済学部	黒沼 健	10月20日(金)	7	自然科学概論	123
13	青山	経済学部	高橋 朋一	10月23日(月)	2	GⅠS入門	27
14	青山	経済学部	高橋 朋一	10月23日(月)	3	GⅠS応用	8
15	青山	文学部	柳田 雅明	10月23日(月)	6	生涯学習概論	29
16	相模原	文学部	野末 俊比古	10月10日(火)	2	情報メディア論Ⅰ	120
17	相模原	経済学部	田野 慶子	10月10日(火)	2	経済史概論	305
18	相模原	理工学部	長谷川 美貴	10月10日(火)	4	化学Ⅱ	57
19	相模原	国際政治経済学部	仙波 憲一	10月10日(火)	4	フレッシューズ・セミナー	20
20	相模原	国際政治経済学部	仙波 憲一	10月10日(火)	5	プリゼミ	12
21	相模原	文学部	杉谷 祐美子	10月11日(水)	1	自己理解(総合科目)	105
22	相模原	法学部	西澤 宗英	10月12日(木)	2	裁判と法	300
23	相模原	理工学部	長谷川 美貴	10月13日(金)	2	無機化学A	103
24	相模原	国際政治経済学部	内山 義英	10月13日(金)	2	国際経済学Ⅱ	71
25	相模原	法学部	大山 和寿	10月16日(月)	2	民法Ⅱ	176
26	相模原	法学部	大山 和寿	10月16日(月)	3	民法Ⅱ	148
27	相模原	理工学部	小川 武史	10月16日(月)	3	材料強度学	31
28	相模原	文学部	今井 重孝	10月17日(火)	2	教育社会学概論	128
29	相模原	文学部	野末 俊比古	10月17日(火)	2	情報メディア論Ⅰ	120
30	相模原	経済学部	田野 慶子	10月17日(火)	2	経済史概論	305
31	相模原	文学部	佐伯 胖	10月17日(火)	3	幼児教育原理	103
32	相模原	理工学部	長谷川 美貴	10月17日(火)	4	化学Ⅱ	57
33	相模原	国際政治経済学部	仙波 憲一	10月17日(火)	4	フレッシューズ・セミナー	20
34	相模原	国際政治経済学部	仙波 憲一	10月17日(火)	5	プリゼミ	12
35	相模原	文学部	杉谷 祐美子	10月18日(水)	1	自己理解(総合科目)	105
36	相模原	経済学部	高橋 朋一	10月19日(木)	2	フレッシューズ・セミナー	20
37	相模原	法学部	西澤 宗英	10月19日(木)	2	裁判と法	300
38	相模原	文学部	富山 太佳夫	10月20日(金)	2	英文学概論	329
39	相模原	理工学部	長谷川 美貴	10月20日(金)	2	無機化学A	103
40	相模原	国際政治経済学部	内山 義英	10月20日(金)	2	国際経済学Ⅱ	71
41	相模原	法学部	大山 和寿	10月23日(月)	2	民法Ⅱ	176
42	相模原	経営学部	岩田 伸人	10月23日(月)	2	現代社会の諸問題(総合科目)	154
43	相模原	法学部	大山 和寿	10月23日(月)	3	民法Ⅱ	148
44	相模原	理工学部	小川 武史	10月23日(月)	3	材料強度学	31

授業公開者アンケート

授業公開教員より寄せられた意見（5名より）

a.

- ・担当授業との関係で、見たい授業が見られなかったことが残念でならない。担当教員の下承があれば、ビデオ収録をし、ビデオ視聴の希望を出せるようにしてほしい。
- ・公開二回目となると、やはり、前回以上の専門的なコメントがほしい。そのためには、分野の近い先生の参観が望まれる。
- ・文科省が授業技術の向上を義務化する動きを見せることもあり、各専門分野（学部・学科）ごとに、授業改善委員会を作りそこでの検討が望ましい。
- ・優れた授業を顕彰し、公開授業をしてもらうなどの工夫が必要である。
- ・授業公開なども昇進の基準の中に入れて教育的要素を強化する必要がある。

b.

ご好意あふれるお二人分の参観コメントを拝読し、研究授業のご指導として受け止めました。自分なりに意識していた点にも触れていただき、また改善意見も頂戴でき、感謝いたします。

最後に出席を取るやり方は、第二部の特殊性が気になって実はそうしてきました。特に現職者がお客様を放りだすようなことはさせたくないと考えてきました。出席の取り方については、10分程度時間を確保できる回には、コメント用紙を配る形でやっております。

今後ますますこのような研究授業の機会を設けると良いと考えます。

c.

実際の授業を拝聴させていただける機会は大変貴重です。また、学生の意見も大事ですが、それとは視点の違う、より大人の方々からご意見をいただけることは、授業担当者としても大変参考になりました。

今後とも続けていただければと思います。

実施時期については、一週間のみの前年よりは、二週間あったので、参加しやすくなって良かったと思います。

ただ、担当の方は大変になるかと思いますが、二週間期間を用意されるのであるならば、後期開始直後にまとめて二週間というよりは、例えば、10月と11月に分けてそれぞれ一週間ずつ設定していただけるとよいかと思いました。というのは、私が担当している授業で、学生同士の討論のやり方についてご意見を伺いたいと思っていたものがあつたのですが、後期開始直後のため私がオリエンテーションをしている段階であつたので、公開を見送らせていただきました。おそらく他の先生方においても、学期開始直後の授業のやり方と学期途中の授業のやり方とでは違う点があるでしょうし、そうであるならば、両者について公開の機会があれば、授業担当者及び参加者の双方にとって有益なのではないかと思いました。

d.

今年の方法では役に立つ情報を集めることができないと感じた。

e.

昨年度から授業を公開している。

前回も特に意識していなかったが、今回の方がよりいつも通りのペースで参観されている方を意識せずにできていたと思う。参観者の数に関係なく、外部の方が同席しコメントをくださるのは大変ありがたいと感じている。次回も公開する予定である。

できれば私も他の先生方の講義を拝見させて頂く時間をつくりたい。



参観者アンケート

教員からのコメント

1. 300名という規模の講義で、板書と配布資料だけの従来型講義にもかかわらず、学生が静かに受講していた。技術面のみにとらわれず、まずは何を学生に伝えたいと思うか、といった基本的な事柄から考え直すべきだと改めて思った。
2. アクティビティを取り入れた授業であっても、解説のとき学生は静かに聴いており、めりはりがついている点が、授業構成として良いと思った。
3. アクティビティを取り入れた授業は、学生の関心をひきつけ、印象に強く残るものと思った。
4. 開始に際して、学生の集中を待って授業が始められており、その集中が授業の終わりまで続いていることに驚いた。
5. 教材提示装置を使った資料のうち、印刷して配布したほうが良い資料があった。
6. 最初に下を向いて話されていることが気になった。
7. 授業にパワーポイントを利用されると、(先生が)画面に集中されてしまうので、学生の方をもう少し見ながら授業を進めていった方が良かった。
8. 大教室のほとんどがアクティビティを取り入れた授業に不向きな固定座席のつくりである。
9. タイトルは、通常短い文章なので、著作物とは考えられない。従って、他人が先行して同じタイトルを使い始めていて、それを模倣しても構わない。
10. ホームページで授業内容を掲載するだけでなく、発展課題を提示されていた。
11. 見出し、小見出し等の構成(論文構成)が、他の先行文献と全く(ほとんどを含む)同じであれば、先行文献の著作者が持つ「編集著作権」を侵害している恐れがある。
12. 理工学部の授業を始めて参観し、人文科学系の授業と大きく異なることを知り、大変勉強になった。
3. 200名以上の受講生にもかかわらず、課題の添削を各人に返却されていた。
4. 90分の授業の途中で3分間の休憩があるのも新鮮だった。
5. E306という教室にある機能は、有効に使うと便利で様々な機能が付いていると思った。
6. ITの利用方法として、メッセージャーを利用した意見交換や、レジュメの配布をWEB上で配布し、動画を使用した説明ができると思う。
7. PC操作について、要所要所で学生に確認するとともに、TAを活用されていて良いと思った。
8. SAを活用することは、円滑な授業運営のためだけでなく、SA自身の学習へのモチベーション向上に効果があり、学生・教員双方にとって効果の高い制度であると思った。
9. TAが初心者の方のTAをさりげなく支援していたり、TAと同じ程度の理解度を持つ学生に、他の学生へ教えあうよう指示していたり、自立的支援が果たされていたと感じた。
10. 暗記で覚えるのではなく、順をおって、論理的に説明し、理解させ、自然に学生が必要な用語を覚えていくような指導は素晴らしいと思った。
11. 板書の量が非常に多かったが、実際に書き写してみると、先生の話をもとにしながらでも十分書き取れるスピードだった。板書はレジュメと重複する内容を省いてもいいのではないかな。
12. 学生に感想を求めるのであれば、学生が感想をもつような「伝わる」授業であることが必要。
13. 学生の3分の1が眠ってしまっていたが、授業展開として、レジュメを配布し、それに基づき口頭で説明していく方法に原因の一つがあったのではないかなと思った。
14. 学生の発表に対するアドバイス等において、学生に考えさせつつ、各々の考えを引き出し授業をされている雰囲気印象的だった。
15. 学生は前回の授業内容を自分なりに「ノート」としてまとめ、教員はそれを毎回レポート形式で提出させて授業出席をとっていた。この方法は、出席点につながる緊張感を与えつつ自学習を促すことで理解を深め、同時に学生の授業への参加、理解度を確保するという、上手な両立がはかれる効果的な方法だと思った。
16. 学生への解説の内容によっては、CGを使うといった工夫ができるのではないかな。
17. 学生を大人として扱い、受講者としての責任感を求められる授業こそ、学生の成長にとって真に重要だと知った。
18. 課題を提出し、クラスで発表するという大学らしい講義と感じた(まるでゼミのようだった)。

職員からのコメント

1. 100名サイズの授業でありながら、授業進行のストーリーがしっかりした完成度の高い授業からか、私語もなく、学生は一生懸命取り組んでいた。
2. 150名の授業に300名サイズの教室が割り当てられ、学生は部屋の後部に集中して着席しているため、学生の近くにいき質問を受け、板書するために黒板まで戻る、ということに大きなエネルギーを費やされているように思われた。

19. 教員と学生のコミュニケーションが無いと、学生が遅刻しても気まずい雰囲気がない。
20. 教科書の利用方法として、教科書をPCに読み込ませ、画面に映しつつ解説する手法が新鮮だった。
21. クラスサイズは学習意欲や教育効果に大きく影響していると実感した。
22. グループワークをおこなう授業で、授業前にグループワークに入れる体制をある程度作っておいたほうが、時間の省略になる。
23. 講義内容が、特定部署の事務職員が聞いてもためになる内容であり、良かった。(事務職員の啓発になる)
24. 開始時間から終了時間まで、きっちり講義をされていた。
25. 最初に授業が学生との協同作業であることを再確認され、「生徒」と「学生」の違いについて自覚を促されていた点に感銘を受けた。
26. 指示された課題に対して、自分なりの意見をまとめ、発表する授業。発表の仕方に多少の巧拙があるものの、皆が自分の意見をしっかり主張していた。大学生の学力低下をよく耳にするが、それが全く感じられなかった。
27. 指定教科書に沿って授業が進行するので、学生の予習・復習の自学習が可能で良いと思った。
28. 授業終わりの20分で本日の課題を提示、回収することで、学生の理解度を確認していた。
29. 授業開始15分前には準備を全て終えて、壇上でお待ちになっていることが素晴らしいと思った。
30. 授業開始の導入として時事問題に触れることで、学生の関心を引いているように思えた。
31. 前回までの授業のまとめをパワーポイントにて掲示し確認。授業終了時に本日の授業のまとめをパワーポイントにて掲示し確認。授業全期間を通して使用するプリントと当日の授業で使用するものを併用されていた。
32. 授業の意義は、知識を学生に授けるというよりは、その分野の入口を指し示すことに重点を置くべきではないだろうか。
33. 授業は知識の伝授と学生の興味を引く工夫のバランスに気を配ることが大切だと思う。それが配慮された授業だった。
34. 受講者に一体感があり、授業の始めから終わりまで活発な意見交換がされていたことに驚いた。
35. 受講者に多少の差はあるにしても、講義内容、テーマに対する問題意識が一樣に高く感じられた。
36. 受講生(学部・学科等)を考慮した補足説明がされていて、学生の理解度が高まると思った。
37. 成績は定期試験だけでつけられており、出席や授業毎の課題レポートは成績に考慮されないことになっている授業では、意外にも出席率が向上していた。学習意欲も向上しているように思えた。
38. ゼミ形式の授業に外国籍の学生が1名参加しており、ややとどろしい日本語ながらも、他学生と同じ内容をこなしていて、そういう状況が新鮮だった。
39. 前回の授業終了時に回収した「授業内容に関する課題(アンケート)」(毎回実施)に記述された質問等について解説をおこなう。
40. 先生ご自身の学問領域について話されることをご自身楽しんでおられるように、一生懸命熱意をもって話されている姿が印象的だった。
41. 先生の声は大きくはっきりしているのだが、早口で矢継ぎ早に説明されるので、あわただしい感じがかった。
42. 前半の1時間で講義をおこない、後半の30分で画像を見せながら実際の様子を説明する方法も一つの授業展開の手段であることがわかった。
43. 第1回目の講義時に「講義の方針」と「講義スケジュール」が配布され、それが徹底されていた。
44. 大教室にもかかわらず、肉声で講義をおこない、学生を教室の前部分に着席させ、私語をさせさせなかった。
45. 大教室の講義だが、資料の多さ、資料の説明の仕方が、演習を受けているように感じられた。
46. ただテキストに沿って授業を進めるのではなく、関連した時事問題を、時には映像を交え扱っている点が、授業内容に興味を持たせるきっかけとして効果的と思った。
47. タブレットPCを利用するといった、実際の教育効果はさておき、その積極的な姿勢が大事なのでは、と思った。
48. テーマごとに質問等を確認していたが、教壇から降りて、学生のノートの取り具合等をチェックするような、学生と近い距離でのアプローチがあれば更に良かった。
49. 板書する文字は見やすい文字であるべき。筆記体を使うのは避けるべき。
50. ポイントとなる事柄・単語を、画面上でマーカーして示す工夫も新鮮だった。
51. 真面目な学生が多かったので、彼らに学んだことや感じたことを人前で表現させる機会を与える授業があってもよいと思う。
52. レジュメの内容と、重ねて口頭での説明を行なうことは、学生に理解させ、考える余裕を持たせることができると思った。

授業公開者の感想

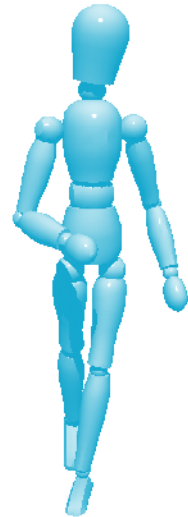
文学部・助教授

野末 俊比古

受講者120名の講義を2週にわたって公開した。教員の参観者は1名（FDプロジェクトメンバー）のみであった。コメントが大変参考になったので、もう何名かのコメントが欲しかった。

この際、すべての授業がいつも公開され、自由に参観できるようにしてもよいかもしれないと思う。受講者以外が参観することに差し障りのある授業もあるだろうが、多くの授業については、受講者の妨げにならないようにするという大前提のうえであれば、マイナス面よりもプラス面のほうが大きいのではないだろうか。

もちろん、FDは授業公開（参観）だけで実現されるものではない。授業の運営については、担当教員の責任において最終的な判断が下されるべきである。しかし、改善につなげる判断材料を得る機会として、授業公開（参観）は有用だろう。ちなみに、娘の通っている小学校では、保護者は一年中いつでも参観してよいことになっている（FDをねらいとした制度ではないが）。



経済学部・教授

田野 慶子

私は、経済学部の基礎科目の一つである「経済史概論」を公開した。これは、大教室で行う受講者数300名前後の授業である。毎回、板書と配布したプリントの解説とを併用しながら、できる限りわかり易い内容になるよう努力している。

公開授業の最大のメリットは、自分の講義に対する客観的評価を得られた点である。長年教員をやっていると、多少なりとも授業がマンネリ化してしまうものである。そうしたなかで、授業参観者の方から感想をいただいたことは、自分の授業を問い直すいい機会となった。多くの教員の方々にも、ぜひこうした機会を活用していただきたいと考えている。

これからの日本では、「教員がどのような授業をしているか」といった点が、大学の社会的評価を大きく左右することになるだろう。学生たちのためにも、また、大学のためにも、公開授業を通じた授業改善が求められていると思う。

理工学部
専任講師

長谷川 美貴

授業公開に毎回参加している。理由は、外部の意見が授業をブラッシュアップする機会になると考えているからである。特に、私はまだ講義を担当してから6年目であり、カリキュラムに沿った内容であるにしても発展段階である。板書、声の出し方、話すはやさ、教材研究は、効率よく学習させるためにとても重要である、と教育実習の前に学んだが、実践となると思うように進まないこともある。マンネリ化していかないためにも、公開して外部から意見を頂く機会は本当にありがたいと思った。幸いにして、よいコメントをいただいたので、励みにもなった。

種々の学術研究会での経験で、研究成果の甲乙の印象は、内容が同じレベルだった場合プレゼンテーションに関わることを痛感している。講義はパフォーマンスではないが90分のプレゼンテーションである。学生を飽きさせずモチベーションを持たせて学習効果を上げるか、教材研究したすべてをいかにプレゼンテーションするかということは、毎年聴講する学生が変わり、反応が変わるので、これからも私には課題である。

残念なことに、タイミングが合わずに他の先生の講義を拝聴することができなかった。授業公開ウィークが根付いて互に行き来し、講義そのものを勉強できる機会が増えるとうれしい。

授業参観者の感想

(相模原キャンパス) 教育・学習支援ユニット授業支援グループ



私は情報技術を活用して授業の構築を支援する部署にありますが、今回の公開授業への出席は、今後の業務にも良い勉強となりました。学生の頃とは異なり、受講する学生の様子を伺いながら、先生の伝えたいことが明確に、効果的に伝わっているかという点に注意しながらの受講となりました。

参観させて頂いた授業の中には、授業に関するアンケートや小レポート等を課し、熱心に回答を行なっておられる先生もいらっしゃいました。そういった双方向のやり取りには、Webのような情報技術を利用することも有効ではないかと思われます。授業以外にも、時間・場所に制限されることなく、意見の交換・集約も可能となります。本学でも、2007年度より「学習管理システム」機能を持った「学生ポータル"EagoWing"」の運用が開始されました。今後こういった手段を活用して、授業の意見交換を活性化する取り組みも検討されていくのではないかと考えております。

(相模原キャンパス) 教育・学習支援ユニットメディアライブラリーグループ 城島 奈奈子

受講者は100名以上いたと思いますが、授業にあたり担当の先生より、教材として当日授業のパワーポイント資料と前回授業の感想文を抜粋したコピーが配布されていました。

担当の先生は、配布資料を読み上げ、また、パソコンを操作してパワーポイントの内容の説明をしながら授業を進められていましたが、先生がお話をされているにもかかわらず学生達の私語が多く、授業が進むにつれて今度は内職らしいことを始める学生がいたり、机にうつ伏せに寝ている学生がいたりしました。

授業内容そのものは大変興味深く参観させていただいたのですが、このような学生達の態度には落胆いたしました。とても残念でなりません。

今回授業参観してまだまだ検討課題が残されていることを痛感いたしました。



総合企画部知的資産連携機構による研修

実施概要

学長室 本橋 正人

(FDプロジェクトチームメンバー)

「知的財産」と言うと、特許権や著作権などが思い浮かぶが、日常の教育、研究においても関係している。授業で資料の1つとして雑誌等のコピーを配布する場合、出展を明記することはもちろんだが、コピー枚数についても配慮が必要となる。知的資産に関する問題は広範囲にわたるが、教育、研究において身近な問題を含んでおり、社会情勢に照して差し迫った課題の1つと言える。

本学院においては、知的財産を扱う部署があり、この研修は所管部署担当者からレクチャーを受けることにより知的財産についての知見を広めることを目的として実施された。

研修は、2006年11月13日、FDプロジェクトチームの会議開催時、FDプロジェクトチームメンバーに対し行われた。講師に本学総合企画部事業開発・推進グループ知的資産連携機構の竹田由美子氏を招き、「教育・研究に関わる日常の知的財産について」と題し、「教育研究と研究室マネジメントの足元にあるリスク」に関し、共同研究・受託研究・発明等に関わるトラブル、技術流出、貿易規制、研究成果に対する守秘義務、研究と著作権との関わり、著作権法に関わるトラブル等々について、事例の紹介、説明等がなされた。

実施内容

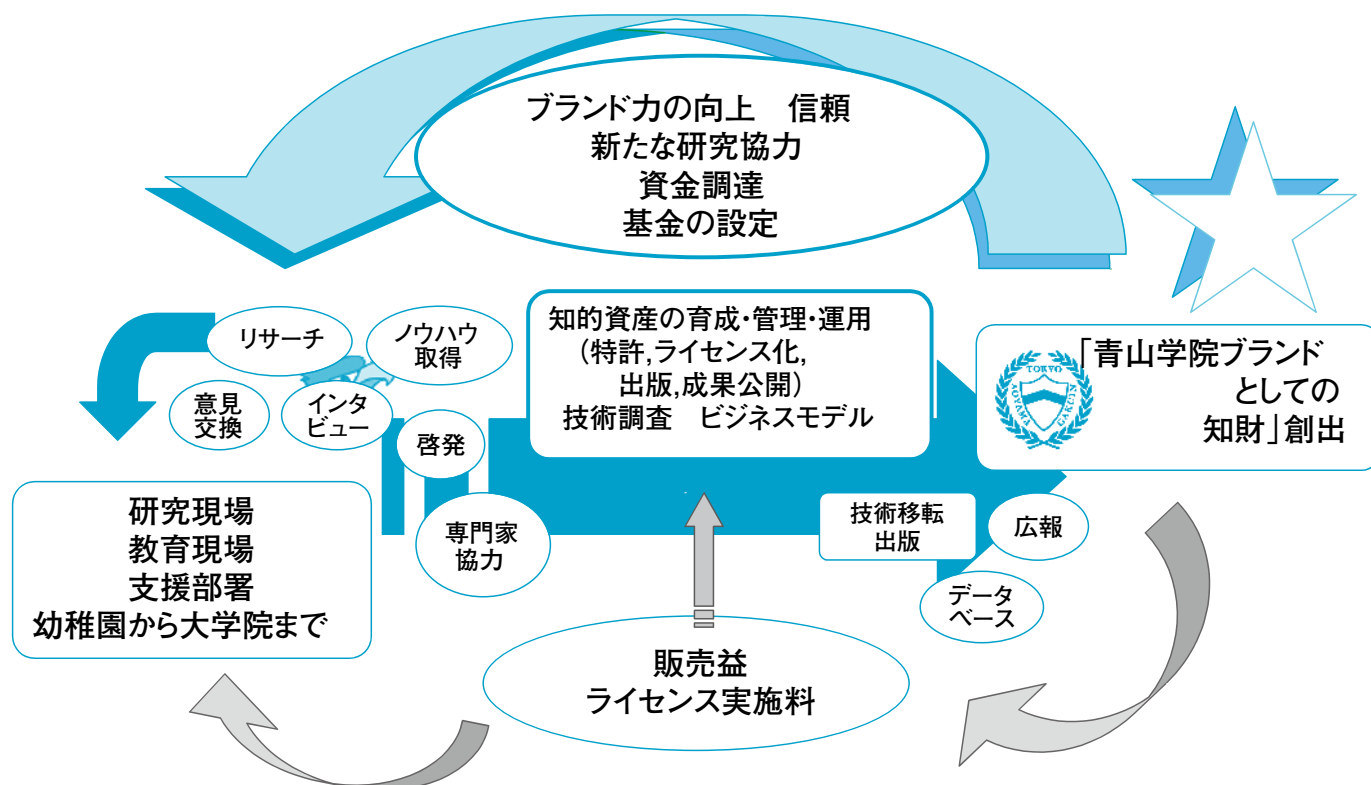
本部総合企画部事業開発・推進グループ
知的資産連携機構

竹田 由美子

青山学院知的資産連携機構は青山学院全体の教育と研究の成果や、「伝統」や「特色」「よさ」といわれる知的資産を具体的に形のあるものとするために、知的資産創生の段

階から発生する様々なトラブルや注意事項をリスクマネジメントしながら、知財のエコサイクルの構築を試みています。

青山学院の知的資産サイクルモデル



この度、大学FDプロジェクトよりお声掛けいただき、知的資産の創生から取り扱いに関わる様々なリスクの極一部を大学の研究室マネジメントに焦点をあててご紹介しました。

知的資産連携機構のご紹介

◎ごあいさつ

◎知的資産連携機構のメンバーはこんな基礎知識を習得します

- ◎ アカデミックバックグラウンド 理工学 知財学 情報工学 大学行政
- ◎ 加盟学会 日本知財学会 大学行政管理学会

◎4つの特色

- ◎ 自発的な権利の委譲をお願いしています
- ◎ 大学院から幼稚園まで 一緒に青山の知財を構築します
- ◎ 「生もの」として「活きている知財」の管理 DB を運用しています
- ◎ 臨床現場として「知財クリニック」窓口を設け個人のご相談を受けています

教育事業に関連するルール

- ◎ 設置基準・・・だけではありません
- ◎ 著作権・・・だけでもありません
- ◎ 不正競争防止法
- ◎ 個人情報保護法
- ◎ 特許法 商標法
- ◎ 商法 民法 新会社法
- ◎ テキストのネット配信は通信関連法規も etc

- ◎ 活動してみても、初めて複雑さを痛感しています（予想以上の重症です）
- ◎ 調査段階で予想されたフリクションは少なく いったん避けて、こじれてから相談いただくパターン
- ◎ （知財大学院では教えてくれなかったことばかり…？）

FDという 先生方のプライドもあり「マネジメント手法」として
リスク管理の視点からのアプローチだと 耳を貸してくださった…

教育研究と「研究室マネジメント」の足元にあるリスク

◎ 共同研究・受託研究・発明のトラブル事例

- ◎ 千葉大学の例（今年度知財学会より）「裁判の検証」として・・・ 206
- ◎ 技術流出・貿易の規制に関する問題

◎ 出版のトラブル事例（チーズとバターの本）（教授と助手の共著）

- ◎ 不正競争防止法もセットでくっついてくる！
- ◎ アイディア（ストーリーや推理小説のトリックなど）は保護されない
- ◎ パロディは？
- ◎ 意図しないで偶然表現が似てしまったものは？ 教科書によくある
権利処理って 著作後に一括で他人に頼めるもの？

◎ ソフトウェア著作権のトラブル事例 一番身近な「内部告発」

- ◎ BSA社とは…
- ◎ 賠償1億が目安になるとかならないとか…

◎ 根っこにある誤解とリスク… 自分の解釈や第三者の言葉による保障で 安心してはいけません！

備忘録や読書暦、執筆メモはとても重要です

ご自身の記録しか
自分を守る助けは
ありません

政府は本当に心から技術や知識の国際交流を
望んでいるのか …研究者と文部科学省だけかも

どの様にトラブルになるのか

- ◎ 管理ミス 情報流出 「個人情報」「研究データ」「資料」「文書の下書き」
授業のノウハウ・テキスト
盗まれる 盗まれたと思ったら自分でHPで公開していた…
公開テキストに不正な引用があった…
- ◎ スタッフとの連絡不足 権利の譲渡や「不主張」の確認もれ
 - ◎ 権利はだれでも平等
 - ◎ 部下や指導学生も権利は平等 論文 発明の帰属 共著・下書きについても同じ
 - ◎ 雇用契約締結もれ
 - ◎ 助手・学生との人間関係
- ◎ 管理の丸投げによる…意図しない違法コピー ファイル配信ソフトに注意
- ◎ いきなりマスコミに… 「松本零士氏 v s 榎原敬之氏」
いきなり公の場で文句を言われる 最初が「ラブレター」とは限らない
- ◎ 交渉から裁判へ
 - ◎ 裁判になるかならないかは損害賠償額の予想などと経費の見積もり結果で決まります
 - ◎ 決してどちらが「正しいのか」では決着がつくものばかりではありません
 - ◎ 最高裁や知財高裁で判決が出ても…判例批判が続きます

授業のみに関わることは…

- ◎ エンターテインメントロイヤルズネットワークのご支援によるセミナー
 - ◎ 「学校における予期せぬ著作権侵害とその実例」 2006.7.17
 - ◎ 予想以上に細かい厳しい指摘
- ◎ 法解釈に関わらず 手抜きと不満と隙があれば 揉め事や裁判はおきる
- ◎ 裁判にならないたくさんの方の交渉が…… 公にならないところで
- ◎ 裁判にするか……裁判の継続は経費と賠償の収支で決まる
- ◎ 今のままでは だれも助けてくれませんか が… 「授業はだれのものか…」
- ◎ 自分の解釈や弁護士「大丈夫じゃない？」は
何の役にも立たないことをご理解ください…
「権利処理が必要です」「手続きが必要です」のほうが善意

大学の研究室の運用は企業の研究業務に比して、多様な人種、備品、資金、情報が入り出し、それらの帰属と属性が時間を追ってめまぐるしく変化してゆくという特色があります。さらに、研究室管理責任者である教員は、客員や非常勤の兼務など帰属の状況変化があるうえに、その活動は企業に雇用されている研究者よりも個人事業主に近いという、大きな特色を持っています。研究室は世間に比べ、時間の流れが穏やかに感じられますが、実際はこの様に複雑でよりどころとするルールの種類が多く、内外の環境変化が激しいマネジメント業務であり、職員との連携が欠かせません。そして職員も対応の法的範囲や専門性が年々広がっていますので、学院全体の連携を強化する必要性を強く感じています。

近年の知的財産関係のトラブルは、ここ数年の「知的財産ブーム」により、権利意識のみが先行し、技術や文化の先達に対する尊敬が置き去りにされている状況が見られます。必ずしも競合する相手ではないのに、法文や商習慣に対する個人の都合や、使い勝手のいいようにとの解釈に根ざしたコミュニケーション不足による、「感情的にこじれてしまった」というトラブルが特徴です。よいコラボレーションを構築できていればもっと充実した研究成果や書籍、コンテンツが構築できたり、受益者が増えたりしたのではないかと残念に思われます。専門家にアドバイスを求めたり確認をとったりする手間をおしまず、お互いに立場をこえた配慮や尊敬をもった対応と行動が要求されています。

学生モニターからの意見聴取

実施の目的、実施概要

事務システム室 藤田 陽一朗

(FDプロジェクトチームメンバー)

昨年、より良い大学の構築・運営に反映させることを目的として開始した学生モニターからの意見聴取を、今年度も継続して行いたいということから、引き続き実施した。対象者についても、昨年同様とすることで前年度との比較ができるよう、以下の3項目のいずれかに該当する学生を選定した。

対象学生

- 1 2005年度給付奨学金受給者、学業奨励賞受賞者のうち、2006年度在籍者
- 2 IT-A (ITアシスタント)
- 3 青山スタンダードSA (スチューデントアシスタント)

これらの対象者である、のべ144名のうち23名（実数として21名）の学生よりモニター承諾の回答を得られた。

活動のテーマを『授業』にすることとし、活動内容を昨年から実施しているアンケートによる意見聴取と意見交換懇談会にした。

テーマを授業のみに限定した理由としては、

- 1 FD活動の中心となるのはやはり授業であり、2006年度のFD活動で取り扱う題材を授業に位置づけて活動していきたい。
- 2 FDプロジェクトで実施している、授業公開、意見聴取、意見交換懇談会という3つの行事について一貫性を持たせる。
- 3 授業に関して学生がどう考えているかを把握する。

以上のことから、授業についてアンケートを実施し、様々な回答が得られた。（アンケート概要及び調査結果については別掲参照）

学生の回答としてはごく一部であり、当然それが全てではないが、学生から見た大学の授業というのが少しは見えてきたのではないと思う。特に、質問項目2「学習意欲をあげるために必要だと思うこと」について、「学生の理解を深めようと教員の熱意・努力が感じられる講義」という回答に高い評価が集中している点は、今後、大学として授業を展開していくうえで、教員・職員とも重要な点になってくだろう。

また、質問項目3「あなたがこれまでに受講した講義の中で、良いと感じた講義、特に印象に残っている講義があれば、どのような講義であったか」という自由記述回答からは、実に様々な視点からの意見が寄せられており、文面に書かれている内容とともに、文章から見えてくる、学生が大学の授業をどう見ているのかということが多少わかるのではないと思う。

私たち職員も、事務業務に従事することから教員や学生への授業支援や促進をしていくファシリテーターが求められているわけであるが、授業中に教室の中へ入るというこ

とはまずなく、授業そのものがブラックボックスになっている。教室の中に入らない私たちがイメージする大学の授業の実態というのは、自分達の学生時代や講義内容や大学案内などの印刷物、WEBに公開されている情報、聞いた話など、授業そのものを見たわけではなく、二次的な情報や過去の記憶や推測によるイメージが大半を占め、事実とは異なっていることが多いのではないと思う。職員で錯綜している大学の授業のイメージを、様々な試みから多角的にアプローチすることで、実態として見えるようにし、共有することは非常に大事であると考えます。

見る人によってはこのアンケートの回答はすでに知っていることと思う人もいるかもしれない。ただ、このような活動を通じ、誰でも知っていることをあえて気づかせてあげる必要もあるのではないと思う。

最後に、アンケートに協力していただいた21名の学生には感謝したい。FDに限らず大学の現状を見える形で認識し、より良い大学の構築・運営をすることは、今後ますます必要とされており、重要になってきている。授業公開や学生へのアンケート、意見交換懇談会の実施を目的にするのではなく、教職員がそれぞれの教育活動や教育支援活動において次に繋げるきっかけとなればと思う。

2006年度学生モニターへのアンケート及び調査結果概要

実施期間：2006年10月18日（水）～10月27日（金）

学生モニター対象者数・アンケート回答者数

対象者	対象者数	回答者数
給付・学業	20	12
IT-A	123	10
青スタSA	1	1
合計	144	23

※ 学生モニター回答者実数としては21名

Q1. あなたが受講する科目を決定する上での優先順位を回答欄に3つ記入してください。

内容	優先順位		
	1	2	3
1 内容に興味があり、受講したい科目だから	5	5	5
2 必修科目・選択必修科目だから	13	4	0
3 シラバスを見て授業内容に関心を持ったから	2	3	3
4 受講し易い時間帯にあったから	0	1	2
5 先輩・友人に薦められたから	0	2	0
6 時間割の都合から	0	2	9
7 単位が取りやすいと思ったから	0	0	2
8 卒業要件単位の都合から	1	3	1
9 その他			

Q2. 学習意欲をあげるために必要だと思う評価ポイントを記入して下さい。

評価ポイント	評価内容
5	強く思う
4	やや思う
3	どちらともいえない
2	あまりそう思わない
1	まったくそう思わない

質問	評価ポイント				
	5	4	3	2	1
シラバスに書かれていた授業計画・内容の講義	3	13	3	2	0
学生の理解を深めようと教員の熱意・努力が感じられる講義	15	6	0	0	0
定刻に始まり、定刻に終了する講義	1	6	8	5	1
授業に集中できる私語の無い講義	1	7	7	5	1
受講者数が適切である講義	7	9	1	8	1
教室の設備（マイク、OHP、コンピュータ）や広さが適切である講義	5	10	3	2	1
授業を進める上での教材・資料等が用意されている講義	5	10	4	2	1
TAやSAが補助についてくれる講義	1	3	5	10	2
良きアドバイスや相談に乗ってくれる友人が一緒にいる講義	3	5	4	8	1
その他	1	1	0	0	1

その他を選んだ人は具体的に記述してください。

- ・適切かつ効果的な小テストをする講義。学生の自主性を尊重した出欠席のカウントをする講義。受講者全員が快適に授業時間を過ごせる講義。
- ・具体的な最終目標の揭示。興味をもたせるような指導教員の話術。

Q3. あなたがこれまでに受講した講義の中で、良いと感じた講義、特に印象に残っている講義があれば、どのような講義であったか自由に記入してください。（担当者名・科目名の記入は不要です）

- ・ただ教科書をなぞるだけでなく、オリジナリティのある授業進行の授業。生徒にわかる言葉で理解を深めるようにしてくれていた授業。授業の内容以外にも、参考になる本やちょっとしたエピソードなどをまじえてくれる授業。（こういう話が本当に理解を助けてくれたりすると思う。）本来の授業内容以外のことにも造詣の深い先生の授業。

4年間通学して、「この授業を受けることができてよかった」「授業料を払った甲斐があった」と思うような本当にすばらしい授業というのは実際にいくつもあります。

- ・教員が学生（前の方に座っているor積極的な）の名前を覚えてくれる講義。

- ・毎回授業内で実験を行い、その実験についてのレポート提出があった授業。毎週のレポートは大変だったが、この授業によって基礎的な知識が身についたと思う。講義だけでは身につかないものを得ることができた。

- ・A先生の授業が大学生活4年間を通して最も良い授業であったと感じています。最も特徴的な点は他の授業にはない厳しさがあったことだと思っています。結果として、最も力のついた授業でした。そして厳しい授業にもかかわらず、教員の熱意や分かりやすい説明に、多くの学生がA先生を支持し、力をつけていったと私は見えています。

- ・教授ではなくて、教師として授業をする先生。

- ・定期テストのみの評価ではなく、毎回の授業で小レポートなどを書かせて、それを成績評価に含める授業のほうが休みにくくなるし、毎回「考える」という作業をするのでいいと思いました。また、授業の感想や意見などを毎回書かせる授業は、先生とのコミュニケーションもはかれるので親近感がもててよかったです。

定期テストの時に「公認カンペ」なるものを使用する講義がありました。これは「カンペを作る」という作業で書くことにより覚えられますし、自分は何がわからないのかを作成時に理解できるのです。またカンニングなども防ぐことができるので有効な方法だと思いました。そして作成したそのカンペも成績評価の対象となるのでやりがいがありました。

- ・私語をきちんと注意してくれるため、教室が静かで授業に集中できる講義です。

- ・何をやっているのかが明確な講義がよいと感じました。実際の講義のなかでは教授たちが一方的に説明し、板書するだけの眠たくなる講義が多いと感じます。実際問題の中でどのように活用できるのかを交えながらだと、親しみを持てていいのだと思います。

Q4. 授業や学習環境を改善するためのワークショップを12月上旬に開催予定ですが、参加してみませんか？（この質問の回答はワークショップ開催時の出欠とは一切関係ありません。）

内容	回答数
参加してみたい	9
ワークショップにまでは参加しようとは思わない	12

学生モニターとの意見交換懇談会の開催

実施の目的、実施概要

事務システム室 藤田 陽一朗

(FDプロジェクトチームメンバー)

現在の本学の活動において、業務や立場や部署を越えた形式で、学生、教員、職員が集まる数少ない機会であり、それを継続していきたいということから、今年度も学生・教職員との意見交換懇談会を開催した。

参加対象者も、FDメンバーにかかわらず、多くの教職員との意見交換を目的にFDプロジェクトメンバー以外にも参加を募り、職員から3名の応募があった。このことは非常に大きな収穫であり、今後のSDにも繋がっていくはずである。

今回のテーマは、大学で『授業』にかかわるそれぞれの立場からより内容のある授業を創造していくきっかけにすることを目的とし、学生モニターへのアンケートによる意見聴取の結果から、「学習意欲」「コミュニケーション」「Face to Face」というキーワードで、「今求められる授業とは？—学生と教員にとっての望ましい授業のスタイルを話し合おう—」に決定し、以下の通り実施した。

第2回学生・教職員との意見交換懇談会

日 時：2006年12月6日（水） 13：00～15：00

場 所：第18会議室（青山キャンパス）

目 的：大学にて授業にかかわるそれぞれの立場から課題を持ち寄り、共有し、より内容のある授業を創造していく。

テーマ：今求められる授業とは？

—学生と教員にとっての望ましい授業のスタイルを話し合おう—

キーワード：学習意欲 コミュニケーション

Face to Face

出席者：FDプロジェクトメンバー13名（教員4名 職員9名）

職員3名

学生1名

前項に記載したアンケートにある、意見交換懇談会に参加してみませんか？という質問に対し、参加してみたいと回答した学生モニターが9名いたのだが、結果1名の参加のみ、FDメンバー以外の教員も参加者がいなかったのは非常に残念であり、FDプロジェクトとしてのあり方、情報発信の仕方や開催方法等検討していく必要がある。

意見交換自体も、私のファシリテーションスキルの未熟さから、当初のテーマであった授業という範囲での意見が思うように引き出せず、正課外活動からFDに取り組むという方向に展開してしまったが、企画、実施、ファシリテーターとしての経験は私自身のSDとして大きな収穫であったことは間違いなく、意見交換懇談会で出された意見も本学にとって貴重な意見であった。また、参加できなかった学生モ

ニターの1名から、今の大学の授業についてコメントしていただいた学生がいたことをここに加えておきたい。

日本の学士教育課程は、2008年度からのFD義務化に向けて動き始めており、次年度以降の取り組みが非常に重要となってくる。さらに今後は、大学内だけの学生・専任職員・専任教員だけでなく、経営者や非常勤教員、また、総合学園のメリットを活用して、女子短期大学はじめ青山学院にかかわる教職員など対象を広げて参加者を募り、活性化していくことも一つの方法であると思う。

最後に、今回の意見交換懇談会に参加していただいた学生、職員ならびに参加はしてもらえなかったがコメントをいただいた学生に感謝したい。今後の学生生活や業務等に繋げてもらえれば幸いであり、私自身も今後の業務に結びつけていきたい。

意見交換懇談会での主な意見交換の内容

○授業公開に関して

- ・私語をさせない工夫づくりが重要。
- ・初めて機材を使用する教員に対して講習会を設ける場が必要である。
- ・職員も公開されている授業を参観し、業務を考えていく必要がある。
- ・他の先生とは異なる取り組みをしていた授業は印象的であった。
- ・先生が熱意をもって行う静かな授業は印象的であった。
- ・グループワークを取り入れた授業は非常に印象的であった。

○学生に学習意欲を持たせるためには

- ・本学の学生にはどういう特徴があり、どう講義をしていくべきなのか。他大学において非常勤講師として授業をしている先生方にうかがいたい。
- ・多くの学生は熱意があるが、ごく一部の学生において意欲のない学生が存在する。こういった学生が大学全体として問題になっている。
- ・学生同士が学内でチームワークを築くことができる環境が必要である。
- ・様々な授業があり、学部というまとまりの中で、どういったバランスをとるべきかといった観点から学習意欲を持たせることはできないか。
- ・学部としての到達目標を考えた上で、他の教員がどういう授業を行っているのかといった情報を共有し、教育の足場を固めていくことが必要である。

○FDに関する提言

- ・ どのような人材を育てていくかというのを設定しながら、カリキュラムの開発を考えていくのはまさにFDの活動である。
- ・ 大事なのは学生が授業を受けるモチベーションをあげる支援をしていくことである。
- ・ 授業支援として、学生の力を活用するのは非常に効果があり、学生の力を利用していかないと今後の授業の改善は求められない。
- ・ 学生モニターやIT-Aのような取り組みを、学生が対外的にアピールできるよう証明書等に記載し、学生同士のつながりを持たせ、就職活動や将来に結び付けられるようにすることから学習意欲を持たせることはできないだろうか。
- ・ 学生からみれば専任であっても非常勤の先生であっても、青山学院で教えている教員である。また、授業評価アンケートにおいて、非常勤講師が授業評価として最も高かった結果が出た大学もある。FDを進めていく上で非常勤講師への働きかけも必要である。
- ・ 教員や職員がいる中で学生がFDに参加することに敷居が高い印象はない。学生と教職員で話し合いができる場を更に作っていったら欲しい。
- ・ FDも形として結果を出し、反映できるようにしなければならない。

参考 参加できなかった学生からの意見

- ・ 授業の改善という問題ではないのですが、個人的には大学の授業がビジネススクール化していることが最近とても気になります。具体的に何かに役立つという授業をすることだけでは、これから就職される学生のみさんにはけっしてプラスになるものでもないのではないかと考えています。
- ・ 学校から授業改善アンケートがされていますが、先生によっては「学生の顔をみながら授業をするわけではない」との理由で行わないということが過去にありました。

一方では、アンケートが学期末に近いので、テスト情報だけを聞きにくる学生までもが回答するというのも先生にとってはやりきれないだろうな・・・と思っています。（普段、全く授業に出ていない人に評価されるというのは・・・）

企業でもコミットメントの低下というのが話題になりますが、学生の学校に対するコミットメントというものも考え直す時期にきているのかもしれない。

意見交換懇談会事後アンケート (抜粋)

参加職員より

- ・ 懇談会の中から、「意識の高い学生の力を有効に活用していく」という結論に結びつけることができたのは、大きな成果だったと思います。

全学教学問題検討委員会の講演で、学校運営には、執行部に直接改革の話をもっていっても動かすことはできない、何よりも学生自らが行動できる組織をつくり、そこから声を上げさせることで、山を動かすことができる、と学生のエネルギーを利用することが何よりも大切だとおっしゃっていました。

今回のプロジェクトの意見は、そこにも通じていくのではないかと思いますし、学生の可能性を引き出し、いくしくみ作りも学校の仕事ではないかと思います。

このプロジェクトは、学院のFD・SDにつながっていく施策を打ち出していける権限があると思いますので、どうか形だけでなく、有効な取り組みを推進していただきたいと思います。

特に、最後におっしゃったように、学生に形としてメリットになる方法を考えていくのが、具体的施策には必要かと思われます。

- ・ 今後、FDが義務付けられる中で、所属部署での業務を抱えながら、プロジェクト制のFDでは限度があるのかなと感じました。

FDを支援する部署は、他大学では徐々にでき始めています。本学にもFDを支援する部署は必要だと考えます。意見交換懇談会では、効果的な授業支援をする為には、教員・学生のニーズを知るのが重要だと述べさせていただきましたが、それを行うには、FDで挙げられる声が必要であると思っています。授業・教育支援とFDはセットとして考えるべきだと思っています。

FDは、大学の様々な課題の中でも、難しい課題だと思っています。今まで培われた授業方法を急に見直して、改善するというのは、教員に戸惑いがあるのが当然かと思っています。よって、円滑な取り組みは難しいと思いますが、上記のように、FDに取り組む体制を少しずつでも整えていくようにして頂けると幸いです。

FDプロジェクトチーム職員より

○意見交換懇談会対象者・対象者数について

- ・ 授業公開教員も交えてよかったのではないかな。
- ・ 学生モニターの対象について、次回は違った視点で考える必要があるかと思う。
- ・ やはり学生モニターの数が少なかった。

- ・議論するには人数が多すぎる。

○開催テーマについて

- ・FDが定着していない本学にあっては、交換した意見の咀嚼が難しいのかもしれないと思う。キーワードを掘り下げてテーマに近づく方法で議論する方が、具体的になるのではないだろうか。
- ・学生、教員、職員が共有できる共通のテーマを設定することは、難しいように思う。(矛盾しているが、三者による意見交換懇談会はあった方がよいと思う。)
- ・「授業」というテーマだったので、職員として意見を述べることに気持ちの上で抵抗があった。

○議論の展開について

- ・議論の展開が、テーマやキーワードとどう繋がるのか、上手く理解できなかった。
- ・難しい状況の中で職員が司会・進行を担当したことは、大きな意味がある。職員が教員の行う授業について積極的に改善していこうとする姿勢が表れていたように感じられる。
- ・当初想定していた進め方と違ってしまったが、三者から前向きの意見を多く聞くことができたので良かったと思う。

○ワークショップの中であげられた意見のうち、特に今後も検討していきたい内容

- ・青学生が他大学生と比べて優れている点も伺えたので、長所を生かす取り組みを考えることも必要である(受け入れやすいFDの導入により、楽しく、即効性のある効果を期待できるのではないか)。
- ・大学の最大の商品は教育力(授業)である。大学に勤務している以上、所属部署に関わらず、授業支援等のために現場を正しく理解する必要がある。

○青山学院大学FDプロジェクトチームで実施したい企画

- ・外国人留学生に授業の感想を聞く機会を設けると、何か改善のためのヒントや新しい発想が生まれてくるような気がした。
- ・卒業生や企業の方々と「青山学院大学の教育に何を期待するか」といったテーマで本学の教育の向かうべき方向性について考えてみるのもよいのではないか。

○意見交換懇談会を実施しての感想

- ・FDはいろいろなアプローチがあり、一部の教職員が理解している段階に進むためには、本学がどのような方向で検討を進めていくのかを見定めて行く必要がある。
- ・自分自身として、どういう目的や方法でFDを進めていくのか、十分整理できていない。FD義務化の方針も打ち出されており、本学ではそうした社会の動きをどう捉えて今後運営していくのかを考える必要がある。

狭義の「FDの活性化」は、職員中心のプランニングには限界がある。その理由は、①職員が教員の状況を十分理解することが難しい、②教員自らが本気で取り組まないと目標達成は難しい、など。

教員と職員で視点の違いがあるのは当然であるが、まず信頼関係を構築することが大切であり、意志を共有することと適切な役割分担を実現させることが好ましい。

そのためには、SDへの取り組みが遅れているので、目に見える形で職員の資質を向上させながら、教員をマネジメントすることが必要であると考えます。

以上のことから、このプロジェクトは、初期段階であるコミュニケーション充実の場であると考えても良いのではないかと。そうした目標を設定するならば、頻繁なミーティングを行い、率直な意見交換をする形態のほうが好ましいのではないかと。



学生モニターとの意見

本部総合企画部事業開発・推進グループ 加藤 明子

私は「全学教学問題検討委員会」の事務局を務めている関係で、今回の意見交換懇談会に出席させて頂きました。FDプロジェクトメンバーの教職員の皆さま、さらにはモニターの学生さんの意見を聞くことができ、大変参考になりました。

個々の教職員にFD/SDの意義、必要性を理解してもらうには時間がかかると思いますが、授業公開や授業アンケートを地道に続け、意識を植え付けていくのは大切なことだと思います。FD/SDが義務的・形式的に進められるだけでなく、大学の社会的な役割の一つである「将来の日本、そして世界を担う人材育成」のために自分たちは何をすべきか---それを1人1人の教職員が考え、行動できるようになったら素晴らしいと思います。

ただ、それが一番難しいことなので、このプロジェクトの今後の活動にはおおいに期待しています。専用ウェブサイトを作り、常に情報発信し、学内にもっと活動を認知してもらえるといいと思います。



経済学部第二部経済学科 学生モニター

意見交換懇談会に参加させていただいた理由につきましては、一学生として日常感じていることを少しでも大学側に伝えられればと思ったこと、そして、大学側がどのような意図を持って、授業や学習環境の変革に取り組んでいるのかについて、大変興味があったからです。

普段、我々学生が授業や学習環境について、気軽に意見を述べられる機会は、各科目の授業期間に一度だけ設けられた「授業改善のための学生アンケート」（以下、アンケートとする）の際のみであり、敷居が高く感じられる「大学へのご意見・ご要望投稿フォーム」（以下、投稿フォームとする）を利用するだけの論理展開と気力を発揮できる学生は決して多くはないと思います。アンケートそのものも、アンケートを行った講義をたまたま実習や疾病等で欠席した学生の意見は、二度と受講者の声として取り上げられないことになり、また、教職課程などアンケートを行っていない科目については、改善が一切図られていない可能性も十分あると考えられます。

過去も未来も、勉学に生活を捧げようとする大学生の心意気は変わらないかとは思いますが、ほんの一部の学生の素行の悪さや受講態度の劣悪さは、周囲の学生の学習意欲をそぎ、大学の教育サービスの品質低下へと繋がりを及ぼす節は否めません。私語や寝息、携帯メールの打ち込み、授業中の教室への出入りなどによる聴覚的な不快さのみならず、喫煙後や飲酒後の吐息による嗅覚的刺激、他科目のレポート作成やテスト対策（い

本部財務部大学青山経理グループ 沼尻 剛

意見交換懇談会に初めて参加して感じたことは、良い意見交換ができているなということでした。教員の話す内容は業務をしている時には耳にしないことであり、学生が話すことも自分の学生時代とは内容が違いました。教員から発する学生の態度や授業風景を耳にすることで、今の学生の大学生活を想像することができました。これは自分にとって、思わぬ収穫だったと思います。しかし、意見交換懇談会としては学生の参加が1名だったことと教職員の自発的な意見が少なかったという印象を持ちました。はっきり言えば、きれいすぎるし、良いことしか意見がでない。初めて出席した者からすれば、こんな貴重な意見交換懇談会こそ、膝を突き合わせて話をしてもいいのではないかと思います。そして、参加している職員はこの意見を細かく理解し、具現化する仕組みを構築するべきではないでしょうか。3年目の2007年度は、意見の具現化を通してFDという活動が広く大学に浸透することを願います。

交換懇談会に出席して



わゆる内職)などによる視覚的刺激は、学生自身が個別に他の学生に注意を促すには限界があります。単に教室にいただけという、そういった迷惑的な学生に対して、出席カードをどのように用いて、いかに的確に評価に取り入れていくかについては、各先生方のご判断にはよりますが、実務的な煩雑さとの狭間で、うまく行えている授業は少ないようです。

一学生としての率直な要望と致しましては、より適正なアンケートを行うための項目の修正・追加、アンケート実施回数の増加、投稿フォームをより自由に利用するための配慮(一部の教員の非人間的な言動・行動の相談については、匿名での受付も考慮すべきだと思います)、意見交換懇談会開催回数の増加および対象学生の増幅、職員による定期的な授業監督(TAのいない授業で教員が一人で大勢の学生の指揮をとるのは大変だと思います)、新規メディアや校外学習の効果的な活用促進、事務窓口職員の怠慢の態度への指導の徹底…などが挙げられます。多数の学生が秘めている潜在的ニーズをいかに捉え、大学側の役務提供をいかに改善していくかにつきましては、青学の教職員の方々の意識の変容ひとつで、いかようにもなるかと思っています。青学を母校とする多くの先輩方や、これから青学で学びゆく多くの後輩達のためにも、有意義なFDプロジェクトの継続をお願い致します。

最後に、教員、職員という、学生とは異なった立場の方から、学校の運営方針について、とても貴重なお話をうかがうことができ、このような会を設けていただきまして、大変感謝致しております。ありがとうございました。

経営学部・教授 田中 正郎
(FDプロジェクトチームメンバー)

ゼミナールの懇親会や合宿において、学校のことに
ついて学生たちから色々な話を聞かされるし、私
の方から学校側の現状を話すことがある。ゼミナールの
学生は選抜された学生であるためか、ほとんどの学生
は積極的に学校と関わろうとしていることが話しぶり
から感じとれる。また勉学においても、ゼミナールで
は特定の個人を除いて遅刻してくる者はおらず、勉学
への意欲は極めて旺盛でかつ優秀である。今回の学生
モニターとの意見交換懇談会に出席された学生にも、
同様の印象を持った。

しかしながら必修科目になっている200名以上の受
講生がいる普通の教室はまったく異なる印象である。
どちらの学生の姿が真実なのか。どちらも現実である
という事実から類推すると、FD活動において各種の
実践は必要だが、その前にFD活動に取り組もうとす
る精神性の方がより重要なのではないかと感じた。

理工学部・助教授 三井 敏之
(FDプロジェクトチームメンバー)

授業公開ウィークのアンケートと、意見交換懇談会
学生モニター事前アンケートをもとに、FDプロジェ
クトの職員、教員メンバーに学生を含め活発な意見交
換会が行われたが、学生の参加者が少なかったのは残
念だった。学生にはこのような場に参加する動機付け
を与えるためにも、参加したことが何か記録として残
りそれが、今後の奨学金、留学などの選考に役に立つ
ようにすればいいのではと思った。意見交換会では、
特に職員の方々の授業改善のための熱意を非常に感じ
た。授業公開ウィークについて、授業中にワークグ
ループをつくって学生同士でディスカッションの場を
設け、後で学生に発表させている講義があると聞い
た。是非、その講義は参観してみたいと思った。この
ように学生から高い評価をうけている授業をしている
教員に授業公開をお願いし、事前に講義名だけでなく、
その講義についての学生からの評価やアクティビ
ティーを知ることができれば教員側の参観者が増える
のではないかと考えた。

前回、『2005年度FDプロジェクト活動報告書』において、同一タイトルのもと、筆者が執筆した頃に比べてみると、FDをめぐる状況はおよそ一変したといっても過言ではない。

第一に、大学院設置基準が改正され、2007年4月より大学におけるFDが義務化された。これは中央教育審議会答申「新時代の大学院教育 ―国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて―」（2005年9月5日）を受けてのことであり、大学院においても体系的な教育課程とともにそれを支える教員の教育・研究指導能力の向上が重要な課題となってきたからである。それまで大学院で努力義務にすらなっていなかったFDが、突如として「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」（大学院設置基準第14条の3）と規定されたことには、FDの実施とその成果を求める緊急かつ強力な要請があることがうかがえる。なお、実務家教員を擁する専門職大学院については、2003年4月に施行された同設置基準のなかで、いち早くFDが義務化されている。

第二に、前述の大学院設置基準の改正を踏まえて、学士課程段階でも同様にFDを義務づけることが予定されている。1999年の大学設置基準改正を経て、これまで学士課程では、「組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない。」（大学設置基準第25条の2）として努力義務化されるにとどまっていた。これを大学院設置基準と同様に「実施するものとする。」と改正し、2008年4月に施行することが予定されているのである。

義務化というからには、FD活動を行うのはもはや大学として当然のことであって、ただたんに形式的に実施していれば済むというわけにはいなくなってきた。どのような活動を行っているか、その実質がおおいに問われることになったといえる。

FDを実施する大学は2005年度で全大学の約81%に上る（文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」）。このうち、比較的多くみられる内容としては、「講演会の開催」（50.4%）、「センター以外の学内組織の設置」（38.3%）、「授業検討会の開催」（37.9%）、「新任教員以外のための研修会」（37.4%）、「教員相互の授業参観」（32.1%）、「新任教員研修会」（31.1%）が挙げられる。設置形態別にみれば、ほとんどの項目で国立大学が公私を引き離して実施率が高い。

しかし、多くの大学にFDが普及したといっても、みてのとおり、これら具体的内容の実施状況はそれほど高くはない。またその実効性についても疑念の声がある。「学士課程教育の現状と課題」（中央教育審議会大学分科会委員懇談会配布資料、2007年1月29日）によれば、「多くの教員の参画がなされているか。」「ワークショップの導入、教員の相互参観や相互評価などの取り組みが遅れているのではないか。」「授業評価の組織的な活用、教員の教育面の業績評価も不十分ではないか。」「ベタゴジー改革を先導する専門的人材の養成・確保が必要ではないか。」「機能別分化、明確化された人材養成目的に対応した教員評価の構築が必要ではないか。」といった数々の問題が指摘されている。その他、同文書では、さまざまなFD推進方策の調和、FD拠点の支援・ネットワーク化、大学院生を対象とした大学教員の養成機能、大学教員に必要な職能や教育力の明確化、教員の教育研究活動を支援する体制および専門性の高い事務職員の養成・研修などにつ

文学部・専任講師 杉谷 祐美子

（FDプロジェクトチームメンバー）

いても言及されている。このように、そもそもFDが義務化される背景には、FDの現状とこれまでの成果に社会が十分納得していないということがあるだろう。

今回の大学設置基準の改正では、FD以外にも教育研究上の目的の制定および公表、シラバスの作成や成績評価基準の明示などの義務化について併せて検討することになっている。現在、中央教育審議会大学分科会においては、それまでの制度部会と大学教育部会を新たに統合した制度・教育部会で学士課程教育を中心とした専門的な審議が進んでいる。設置基準の改正まで視野に含めて、学士課程のカリキュラム、質保証システムなどを総合的に検討する同部会が今後大学政策に及ぼす影響を軽視することはできないだろう。いよいよ、各大学は教育力向上に向けて本格的に取り組まなければならない時期にきた。

それでは、今後われわれはどのようなFD活動を目指すべきなのだろうか。

ここで注意したいのは、義務化の対象である。設置基準上、組織的な研修及び研究の実施は教員個人ではなく、あくまでも大学という組織に義務付けられている。教員個人については義務というよりも、ユネスコ「高等教育の教育職員の地位に関する勧告」（1997年）などにに基づき、高度の専門的職能水準の維持に対する個人の責任として、いわば職業倫理の問題として論じられることが多い。したがって、組織に義務付けられるからといって、必ずしも個々の教員の不断の自己研鑽への自覚と内発的動機付けが阻害されるものではないだろう。むしろ、そうした日常的な主体的努力を支援・発展させ、個別大学の現場に即したFDを実施することこそ、組織側の役割ではないだろうか。

例えば、特色GPにも選定されているFDの先進的事例はこれに相当する。京都大学では、日本の高等教育がトップダウンの啓蒙型FDの段階を終えつつあるとみて、高等教育研究開発推進センターを中核として、自生的な相互研修型FD活動を支援するシステムを開発している。愛媛大学では、教員・事務職員・大学院生が愛媛大学の理念と目標を共有しつつ、教育改善に一体となって取り組み、研修の講師を学内で育成しようとしている。いずれも、大学の実態に応じたシステム、プログラム開発を目指した試みである。さらに、近年では、個別大学の限界を乗り越えて各大学の取り組みを補完すべく、東北、関西、中四国などで地域間連携のFDネットワークが形成されはじめている。

FDに関して専門のセンターを設置し専任教員をもつ国立大学とは異なり、私立大学の場合、ほとんどが委員会等方式をとり、教員が兼任しているのが実状である。しかしながら、FDの主体はあくまでも個々の教員自身にほかならない。特別な組織や専門家がなくとも、日常レベルでごく当たり前に教職員が協力しあってFD活動を進めていくことが最も理想的な私たちといえる。今回の義務化をただ強制的・受動的なものとして受けとめるのではなく、大学人として誇りと見識をもって対応することが重要である。今後、本学の現状と課題にふさわしい本学独自のFDを模索していくことを願ってやまない。

2007年度の活動に向けて

副学長

国際政治経済学部・教授

FDプロジェクトチームリーダー 仙波 憲一

周知のごとく、専門職大学院はFDが義務化されております。学部においても組織的にFD活動をすることが2008年度から義務化されようとしています。このようなことを踏まえ、2007年度は次年度に備える形で学部もしくは学科単位での組織的なFDの取り組みについてのアンケート調査を行います。また2006年度の経験を踏まえ、2007年度は授業公開に変

え、各教員が理想的授業とはどのようなものであると考えているか、についてのアンケート調査をして、授業の改善に資する情報を共有し、改善の実質化につなげたいと考えています。また、2007年度はFDシンポジウムを開き、新しい教育ツールの活用例や、学生からの授業改善のためのアンケート調査結果の分析・活用法についての議論をしたいと思います。2007年度も皆様方の積極的なご参加をお願いいたします。

2006年度FDプロジェクトチームの構成

構成員（20名）

氏 名	所属・職位	氏 名	所属・職位
○仙 波 憲 一	副学長・国際政治経済学部・教授	鳥 海 貴 裕	(青) 学務部教務課
今 井 重 孝	文学部・教授	藤 田 陽一朗	(青) 事務システム室
杉 谷 祐美子	文学部・専任講師	祖父江 健 一	(青) 進路・就職センター・課長代理
白 井 邦 彦	経済学部・助教授	石 井 智 子	(青) 国際交流センター事務室
江 泉 芳 信	法務研究科（・法学部併任）・教授	武 田 智恵子	(相) 教育・学習支援ユニット メディアライブラリーグループ
申 恵 丰	法学部・助教授	小 澤 佳 世	(青) 学長室
田 中 正 郎	経営学部・教授	小 島 まゆみ	(青) 学長室・係長
内 山 義 英	国際政治経済学部・助教授	浜 本 嘉 郎	(青) 学長室・係長
三 井 敏 之	理工学部・助教授	本 橋 正 人	(青) 学長室・課長代理
中 田 恭 子	理工学部・専任講師		
戸 田 隆 也	(青) 学務部教務課・係長代理		

○はチームリーダー

注：(青) 青山キャンパス、(相) 相模原キャンパス

本報告書における所属・職位は2006年10月1日現在における所属・職位を記載した。



本学 FD プロジェクトに対するご意見・ご提案等ございましたら、
下記事務局までご連絡ください。

冊子名 Faculty Development Activities Report 2006

発行日 2007年10月1日

発行者 青山学院大学 FDプロジェクトチーム（学長室内）

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

TEL 03-3409-7510

FAX 03-3409-9424

編集協力 ヨシダ印刷（株）

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

【青山学院スクール・モットー】
